

李朝實錄 第四十九冊

正祖實錄 第三

學習院東洋文化研究所刊

李朝実録第四十九冊奥付

昭和四十一年三月二十五日

東京都荒川区日暮里町六ノ五〇〇

都印刷株式会社印刷

東京都豊島区目白一の五

學習院東洋文化研究所刊行

編纂刊行責任者 末松保和

新學堂
PDG

正祖實錄解說

(一) 李朝の第二十二代の王正祖は、諱は神、字は亨運、號は弘齋。英祖の第二男莊獻世子の第二男として英祖二十八年壬申（一七五二）九月二十二日己卯に昌慶宮に生れた。己卯（一七五九）王世孫に封ぜられ、辛巳（一七六一）入學、冠禮を行い、甲申（一七六四）二月二十日壬寅、眞宗（英祖の第一男）の系を嗣ぎ、乙未（一七七五）代理となり、丙申（一七七六）三月十日辛巳、慶熙宮の崇政門に即位、庚申（一八〇〇）六月二十八日己卯、昌慶宮に薨じた。在位二十四年、春秋四十九。母は惠嬪洪氏（豐山、洪鳳漢の女）妃は孝懿王后金氏（清風、金時默の女）である。

(二) この王代二十四年間の實錄は、純祖即位年（一八〇〇）十二月に編修を開始、五年乙丑（一八〇五）八月二日壬午に印刷を終った。凡て五十四卷、附録一卷。附録續編は憲宗四年戊戌（一八三八）閏四月に追加されたものである。

(三) この王の最初の廟號は「正宗」であつたから、その實錄も「正宗大王實錄」と言われたが、高宗光武三年己亥（一八九九）十二月十九日「正祖」の廟號が追上されたので、今日では實錄も「正祖實錄」と呼ばれる。

(四) この實錄の現存するものは、江華本・太白山本・赤裳山本の三部で、いずれも同一活字印刷本である。板匡、縦四〇・五糧、横二三・五糧、每半葉十五行、行三十字。

(五) 昭和七年（一九三二）の京城帝國大學法文學部景印本は、太白山本に據り、それを約二分の一に縮刷し

二
たものである。但し製冊は舊のまま和装五十六冊とした。

〔六〕いまここに刊行する普及版李朝實錄第四十七、九冊の正祖實錄は、財團法人東洋文庫所藏の京城大學景印本に據り、それをさらに縮寫して原本の四頁を一頁におさめたものである。

昭和四十一年四月

學習院東洋文化研究所

末松保和

正祖實錄(第三)目錄

卷三十七

癸丑十七年

西曆
(一七九三)

正月乙未朔

二月甲子朔

三月甲午朔

四月癸亥朔

五月壬辰朔

六月壬戌朔

七月壬辰朔

八月辛酉朔

九月辛卯朔

十月辛酉朔

十一月庚寅朔

十二月庚申朔

卷三十九

甲寅十八年

(一七九四)

正月己丑朔

二月己未朔

正祖實錄(第三)目錄

一
六
九
二
六
二
天
三
三
毛
囧
囧
天
五
五

卷四十

甲寅十八年

三月戊子朔..... 三

四月丁巳朔..... 六

五月丁亥朔..... 一〇三

六月丙辰朔..... 一〇八

七月丙戌朔..... 一一四

八月乙卯朔..... 一二四

九月乙酉朔..... 一三五

十月乙卯朔..... 一四二

十一月乙酉朔..... 一四九

十二月甲寅朔..... 一五五

卷四十一

甲寅十八年

卷四十二

乙卯十九年

(一七九五)

正月甲申朔..... 一七二

二月癸丑朔..... 一八二

閏二月癸未朔..... 一八七

三月壬子朔..... 一九四

四月辛巳朔..... 二〇二

五月辛亥朔..... 二〇四

六月庚辰朔..... 二〇九

卷四十三

乙卯十九年

七月庚戌朔.....二二六

八月己卯朔.....二二三

九月己酉朔.....二二六

十月戊寅朔.....二二〇

十一月戊申朔.....二四〇

十二月戊寅朔.....二五〇

卷四十四

丙辰二十年

(二七九六)

正月戊申朔.....二五四

二月丁丑朔.....二五九

三月丁未朔.....二六四

四月丙子朔.....二七五

五月乙巳朔.....二七九

六月乙亥朔.....二八三

七月甲辰朔.....二九〇

八月癸酉朔.....二九五

九月癸卯朔.....三〇一

十月癸酉朔.....三〇四

十一月壬寅朔.....三〇七

卷四十五

丙辰二十年

卷四十六

丁巳二十一年（一七九七）

十二月壬申朔……………三三

正月壬寅朔……………三二

二月壬申朔……………三六

三月辛丑朔……………三三

四月辛未朔……………三四

五月庚子朔……………三四

六月庚午朔……………三四

閏六月己亥朔……………三七

七月戊辰朔……………三五

八月丁酉朔……………三七

九月丁卯朔……………三六

十月丙申朔……………三七

十一月丙寅朔……………三七

十二月丙申朔……………三七

正月丙寅朔……………三六

二月乙未朔……………三六

三月乙丑朔……………三五

卷四十七

丁巳二十二年

卷四十八

戊午二十二年（一七九八）

卷四十九

戊午二十二年

四月乙未朔.....三九七

五月甲子朔.....四〇五

六月癸巳朔.....四一〇

七月癸亥朔.....四一五

八月壬辰朔.....四二

九月辛酉朔.....四六

十月辛卯朔.....四四

戊午二十二年

十一月庚申朔.....四五二

十二月庚寅朔.....四六九

卷五十一

己未二十三年（一七九九）

正月庚申朔.....四七七

二月己丑朔.....四八〇

三月己未朔.....四八六

四月己丑朔.....四九六

五月戊午朔.....五〇一

六月戊子朔.....五三

己未二十三年

七月丁巳朔.....五八

八月丁亥朔.....五四

卷五十三

九月丙辰朔	五十六
十月丙戌朔	五十三
十一月乙卯朔	五十七
十二月甲申朔	五十四
庚申二十四年（一八〇〇）正月甲寅朔	五十八
二月甲申朔	五十七
三月癸丑朔	五十一
四月癸未朔	五十六
閏四月癸未朔	五十六
五月壬午朔	五十二
六月壬子朔	六十二

卷五十四

庚申二十四年

附錄

行錄	六十二
謚冊文	六十三
哀冊文	六十三
碑文	六十四
誌文	六十四
謚狀	六十六

附錄統編

行狀·····	六八
遷陵碑文·····	六四
遷陵誌文·····	六四

正祖實錄(第三)目錄

[illegible][illegible][illegible][illegible]

[illegible]

弘寬之計今家燬為渠從相多少凶言無所不至至預防解弛推此可知矣上曰李壬以後忠逆既分予之所以聞義理憂隱防者即一敗苦心子豈愛一家燬而然哉况戊戌李孟休之登科也特令除漢城主簿聖教若曰清華進子欲藩藩而用之況非違乎大臣金在魯刊沈冲慶事而言其謙遜之意則又有貞聲運也而潛則異於貞之下教及雷開義昭鑑之擇定也領府事金在魯欲以兩柳兩相及溥潛為推本溯源之論聖教嘉應三日却難以先朝出之孝因以心之友在甲戌則屬於聖母在辛巳則關於皇兄無論南抑與齊濟前後乎然而于此等微寓誠識以誦涉於甲戌辛巳故也到今延臣盡更言此事營故李家燬之際以倒批而略之予之開明之意亦可見也後有襲家燬而不欲賜觀者則其兩處不當倍重於潛子豈忽於義理也○命度尚道觀察家燬大家三道水軍統制使李潤慶慶尚右道節度使李健秀限畢願仍任右議政金履素以順事人著而亦期俱近奏請仍領也○飭諸道脩築溝塹田廛堅堤埝從右議政金履素奏也○命咸悅縣請召儒道兩年俸牙山例陞遷先是全羅道觀察使鄭民姑狀請聖堂會齋經今咸悅縣監監孫領運上許之至是民姑登

正宗大玉寶錄卷之三十七

對啓言兩年漕運無事領納則該差負當依牙山例陞遷上諭于大臣大臣戰同從之○右議政金履素啓言昨昨年歲末以經行薦選事特教勅勢而已過周歲尚不議遣請申飭諸臣誠心查訪毋為竊遵從之○先是兵曹判書李文源啓言訓我鐵嶺與彼境最近高六鎮要隘易為竊遵從之○先是兵曹判書李少擇其人考績居最者施以防禦使僱屋則衙門既高遠棲有其善自今僉使寮處至是右議政金履素請餉銓會以有地處僱屋之人是送而曾經正副正內外以將然後始許備限限以少數毋得遷移待其贅壻茂者直擬防禦使之任該鎮蘇幕有大放言水肅門臣相繼擢掛劄有實效從之○傳諸道悉捕○訓練大將徐有大方言水肅門入直局出身人數合為一百五十人而三番者每以四十五人定式矣自武藝出身募三十人有關多補之後見今咸額為十六人如前入直分辦無路請依策軍助番之例母論一二三角通同推移入者上曰每番以三十六人定式餘四人休番○遞守禦使鄭民姑以李文源代之趙宗鉉為兵曹判書洪德為判義禁府事○已已逮吏曹三堂以李在學為吏曹參判李冕膺為吏曹參議○庚午以徐有防為吏曹判書○辛未次對馬賦政金履素以某年屢發請中廢酒案上以擾民弊之凡命京兆誠心曉諭俾